

01 国際

鼎談「世界とつながるジョイント・ディグリー・プログラム」

国際化への 前例なき挑戦

名古屋大学大学院医学系研究科・医学部では、学部教育から大学院教育に至るまで、一貫した姿勢のもとに国際化を推進し日本初となるジョイント・ディグリー・プログラムを開始しました。学生の成長と大学の発展を促すプログラム内容や将来の展望について国際化の中心を担う皆さんに語り合っていました。

KASUYA, Hideki



EL-KABBANI,
Ossama Ahmed Lotfi



ALEKSIC, Branko

日本初を切り拓き、
世界基準の
医学教育を先導する



エルカバニ・オサマ・
アハメッド・ロッドファイ

カナダのサスカチュワン大学医学系研究科博士課程修了。オーストラリアのモナッシュ大学Associate Professorなどを経て、現在、名古屋大学大学院医学系研究科名古屋大学・アデレード大学国際連携総合医学専攻教授。

粕谷 英樹

名古屋大学大学院医学研究科博士課程修了。医学博士。アメリカのハーバード大学外科・博士研究員などを経て、現在、名古屋大学大学院医学系研究科教授、国際連携室長、外科系プロジェクト癌免疫治療研究室長。

アレクシッチ・ブランコ

名古屋大学大学院医学系研究科博士課程修了。医学博士。セルビア共和国のメンタルヘルス研究所医師などを経て、現在、名古屋大学国際機構特任准教授。

01 国際

鼎談「世界とつながるジョイント・ディグリー・プログラム」

海外大学との共同学位を日本で初めて実現

粕谷 | 本研究科は海外で活躍できる臨床医や研究者の養成を目的に、学部教育から大学院まで一貫性をもった英語教育と国際化に力を入れてきました。学部1年次から医学英語を学び、6年次の海外臨床実習まで系統的な教育を行っています。また、学部の時に海外臨床実習を経験した学生の多くが大学院のジョイント・ディグリー・プログラム(JDP)にも興味を示してくれています。充実した教育に憧れて本学を目指す優秀な高校生も増え、大学院では100名前後の留学生が学んでいます。

アレクシッチ | そうした留学生をサポートするのが私の役割です。精神科医でもあるのでメンタル面をフォローするとともに、留学生の意見を聞き、より学びやすい環境を整備しています。また、日本人学生については、英語力に関

して大学院で留学生と同じスタートが切れるように支援を徹底しています。

粕谷 | 大学院では、日本初のJDPをオーストラリアのアデレード大学健康科学部と締結し、2015年に「名古屋大学・アデレード大学国際連携総合医学専攻」を設置しました。学生は4年間の博士課程のうち1年以上は相手校に留学して研究を行い、最終的に両大学から共同学位を取得できます。既に両大学の学生が本専攻に入学し、相手校への留学に向けて母校で学んでいるところです。2017年4月にはスウェーデンのルンド大学ともJDPを締結し、学生の受け入れを開始しています。また、現在、ドイツのフライブルク大学ともJDPの締結を目指した交渉を行っています。

エルカパニ | 私はJDPの責任者として本研究科へ着任しました。プログラムの開始にあたって、学生や研究者の皆さんへ相手校の

紹介を行い、シラバスづくりなども進めてきました。実際にプログラムを進めるには、互いに歩み寄り、壁を乗り越えていくが必要でしたが、例えばシラバスの相違なども、それぞれの意見をくみとって、より良い形へ練りあげられたと感じています。これまでも毎年、名古屋大学とアデレード大学、さらにドイツのフライブルク大学は共同で国際シンポジウムを開き、学生交流や研究発表を行ってきました。こうした活動の積み重ねが今の基盤にあると思います。

教育も研究も世界と結ばれ大学が進化する

粕谷 | 学生にとってJDPの魅力は、やはり若い時に海外経験を積めることにあります。異文化の中で相手の考え方を理解し順応していける能力は、研究者には必須のもので、それを養うことができるチャンスだと思います。また、将来、世界で活躍するための人のネットワークをつくれるのもメリットです。しかも、名古屋大学の海外での知名度はまだ十分とはいえませんが、世界大学ランキングでトップ100位以内のルンド大学やアデレード大学は欧米で広く認知されています。二つの大学からの共同学位を持っているということは質の高い大学院教育を受けてきた証明となり、学生の将来や海外の学会での評価にも結びつくものと思います。

アレクシッチ | おっしゃる通りです。海外の研究環境を若いうちに経験することは、国際的な視野を広げるためにも重要です。また、研究を続けるには研究室間のつながりが大事ですが、JDPは国際共同研究への第一歩になるのではないでしょうか。国際共同研究は大学ランキングにも反映され、その数が増えれば、名古屋大学にとっても大きなメリットになると思います。

粕谷 | 私もJDPは本学に好影響をもたらす取り組みだと感じています。互いのカリキュ

ラムを深く知るにより、相手校のより良い部分を学内の教育に応用することができずし、各研究室の研究内容を互いに理解することで、共同研究を増やすきっかけにもなる。つまり、JDPは大学の教育や研究活動などシステム全体を変えていき、将来的には単なる研究室間の連携とは異なるスケールで大学が進化することになるはずです。

エルカパニ | 同感です。単独の大学ではできない教育、各大学の強みを活かした教育の提供は学生の成長を促し、学生は二つの環境で学ぶことで、一つの課題を違う視点から見るができるようになるでしょう。また、大学間の連携がイノベーションのきっかけになり、産業界との新たな連携も生まれてくるかもしれません。本学はアジアのハブ大学を目指していますが、その活動の充実にもつながります。大学の連携により、互いの国への理解が深まることも良いことだと感じています。

世界の学生から選ばれる環境と教育内容

粕谷 | 本学は留学生受け入れの歴史が長く、学部の臨床実習には海外から、しかも欧米トップクラスの大学から応募してきます。受け入れ人数は年間35人ほどですが、応募人数は300人を超える状況で、選抜は非



常に高いレベルになっています。その理由は各科が特色あるプログラムを提供しているため、留学生からの高い評価が次の留学生を呼ぶ好循環を生んでいます。大学院でもアジアを中心に多くの留学生を受け入れていますが、その魅力はどこにあると思われますか。

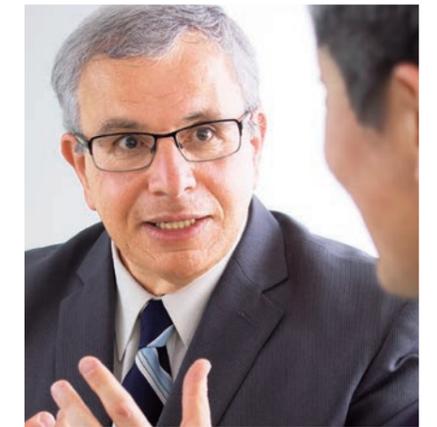
アレクシッチ | 欧米トップレベルと同等の環境で研究に打ち込めるというのが、何より魅力だと思います。アジアの学生にとって日本は距離的にも近いですし、物価も安定し、何より安全に暮らせる生活環境が整っている。また、本研究科は英語の講義が充実していて、言葉の壁が低いというのも大きいのではないのでしょうか。

エルカパニ | やはり教育のレベルが高く、国際化が非常に進んでいる点が好評の理由でしょう。大型の共同研究も多く、そこも魅力だと思います。一方で、日本の卒業論文の書き方は海外とは違うため、そこは留学生がギャップを感じるかもしれません。JDPでは、そうした違いを念頭に対応していかなければなりませんね。

粕谷 | その通りです。JDPでは論文審査を合同で行いますが、我々は締結先であるアデレード大学の手法を取り入れ、論文の評価に外部委員を入れるなど、より公正な質の保証を行っていく予定です。これまでは国内の大学の手法と比較してきましたが、JDPを通じて海外の大学の論文審査や単位認定の方法を知ることができました。これには教員も刺激を受けていますし、システム自体の国際化が進んでいくのを実感しています。

国際化のリーダーとして日本の医学教育を牽引

粕谷 | JDPは今後も拡大を計画しており、アデレード大学、ルンド大学に続き、数年内にフライブルク大学とも締結する予定です。今はまだごく少数人数での滑り出しですが、学



内外で応募者も入学者も増やしていきたいと考えています。

エルカパニ | 現在は2大学間での共同学位ですが、締結先大学が増えれば、日本初の3大学間での共同学位も可能ではないでしょうか。大きな目標ですが、日本初を成し遂げた本研究科ですから、ぜひ高みを目指して活動を進めていきたいと思っています。

アレクシッチ | 数年経てば、JDPの第1世代が研究者として本学に戻ってくるのではないかと期待しています。彼らは研究者として現地の大学との連携を強みに世界水準で研究を進めることができますし、国際的な視野を持った教育者として学生を指導する立場にもなる。海外での経験を教育に活用することで、本研究科の国際化を進展させ、JDPをさらに拡大することにもつながっていくはずです。

粕谷 | そうですね。本研究科が目指すのは、学部で系統的な教育を受けた学生が、卒業後に臨床研修を経てJDPを目的に本学へ帰ってくるという、一貫したサイクルの構築です。そして、JDPから世界的な医学研究者を輩出できるように、さらに努力していかなければなりません。我々は現在も日本の医学部の中で先頭を走る国際化のリーダーであると自負していますが、今後も未来を見つめて前進していきたいと思っています。